報かご屋新聞（カゴシン）

PHOTO 荒川健一

写真二葉とも釜石市内　4月21日 午前10時10～16分

震災現場

「来なければよかった」

そう思うほどの惨状を見てしまった

カメラマンの荒川健一氏からの電話

連絡が本社に届いたのが、四月二十日の夕方。四十日前の三月十日起きた東日本の大震災の現場は、まだ写真でみるような生々しさを晒している。

せめて、この震災を自分のものとしてとらえたい。原発も、復興事業と称するゼネコン・銀行のたかりも。

灘渡る古層の響き

みずのわ出版　文箱垣尚友　写真 大島洋

- お土産攻勢の出版記念会
- 五月二十七日（金）18:30～
- 渋谷の龍盛茶館 03-3461-8006
- お土産 灘渡る古層の響き（5040円）と
  埋み火（書肆えれほん）（3150円）と
  東北山無農薬みかん
- 広東料理食べ放題・アルコール飲み放題
- 会費 九〇〇〇円（カンパ大カンゲイ）

この新聞は皆サマのあたたかいカンパで成り立っています。

読代カンパは下記の処へおねがいします。

郵便振替
00160-1-11979
籠屋新聞社

鴨川市代（だい）623
04-7092-9912
E-mail
naotomo@island.dti.ne.jp

トカラ塾ホームページ　http://user.ecc.u-tokyo.ac.jp/~c080007/

かご屋の動き
トカラ塾の動き

2011年3月11日
～ 5月10日
～ 6月25日

PHOTO 荒川健一

3/11 午後二時、どだったか、桑の大樹の下で籠を編んでいた。首を折るようにして、背を丸めて下向きの姿勢であった。平衡感覚に狂いが生じたのか、船酔い気分に陥った。二十メートル離れたところに建つ母屋のガラス戸がガタガタ鳴っている。「きょうは風が強いなあ」と顔をあげると、建物が揺れている。

自作の小屋だし、建てつけは初めから狂っている。また、揺れても何の不思議もない。が、地面が揺れている。永い時間、揺れが続いた。こんな光景を目にするのは始めてである。一、二分後に防災無線で告知があった。津波警報であった。後刻、耳にした話だが、同時刻に近くの鴨川漁港では、平常通りの水揚げ作業をしていたという。津波は二メートルの高さで海岸線を襲ったのだが、防波堤を越えることはなかった。同じ県の北部では死者も出たのに、南房総には害を及ぼさなかった。東電がたれ流す放射能汚染は、海中に、上空に、地上に、除々に堆積されているが。

3/12 荒川健一写真展「躍態」を観に行く。文京区本郷のヴァリエテ本木まで六時間。鴨川からバスで千葉駅へ出て、そこから京成電車で日暮里へ。そこから歩いて本郷へ。

40名近くが集まったようだ。震災のこわい話をいっぱい聞いた。原発(東電、福島)から黒煙が上がった。トカラ塾の太作兄は京都へ緊急避難。

3/13 新松戸の「ファー・カフェ」に行く。流山で農業をしているアチャや、政チャン、ガスチャンたちも来る。店主の綾チャンの手料理で飲む。合わせて七人。連中は去る一月十三日に鴨川の本社を訪ねて来てくれた人たち。カゴ編みの補習教室の参加者たちである。

3/20 本社所在地である鴨川市代宮(だい)(七十戸ほど)の総会。議長選出。会計報告。アルコール入り。

3/26 トカラ塾主催「カオの南風語り」を中止する。

3/27 痴報籠屋新聞の宛名書きと、手書きから電子印刷へ切替える準備をする。船頭は橋爪太作。下働きは社主。おんみずから。本社で。

4/10 トカラの諏訪之瀬島へデンワを入れる。ナガハ長沢哲夫)へ資料検索を依頼する。同郷は一九七六年(昭和五十一年)に大豪雨のために山が崩れ、家屋がつぶされて何人もの死者が出た。

そのときの惨状を文学にとどめておきたい。社屋が十三年前に燃えたときに、収集資料も失われてしまったので、再収集を始めることにした。これも震災が引き金になっている。　このたびの

4/16 トカラ塾の「南島学ライブ・トーク」が中止となる。今回予定していたのは、「東南アジアの野生動物を追う」だった。講師は浅田正彦氏（千葉県中央博物館）と予定していた。震災さわぎが下火になったら、講話を依頼しよう。

4/16 朗読リハーサル。ピアニストの神武夏子さんがジョイントしてくれる。

トビウヲ干し（中之島）

PHOTO　稲垣　京

突然に"朗読"が出てきて、"ピア"が出てきて、ケゲンな顔をされた読者を多かったであろう。じつは、来たる五月二十七日（金）に出版会が催されるので、その日の出し物のひとつとして朗読が行なわれる。本のタイトルは『難渡古層の響き』である。神戸市でガンバル、みずのわ出版から上梓される。内容は一九七四年（昭和四九年）の六月～九月に流れた島内放送の速記録の解説である。酔った勢で放送することもあれば、刻一刻と迫ってくる台風に備えての警戒の呼びかけもある。社主はその一語一句を孔版に刻んで出版した。放送が流れた明正年であった。それから三十七年が経つが、その時に見えなかったモノが、いま、ありありと眼前に迫ってくる。ピア伴奏による、ホロ酔い放送の再現である。奄美大島の島唄の名手・朝崎郁恵さんのCDから喚起させられた。

ディレクター：稲垣一雄（NJS出版）
ナレーション：大久保実香
音　響：橋爪太作
マイク持ち：今名みぎわ
雑　務：加藤芳朗
日時・会場・その他の事項は同封チラシを
ご覧あれ

。　。　。

4/16 緊急ライブトーク「原発と日本の電気エネルギー、そして農業・漁業」
講話者・稲垣一雄・渋谷のラーメン屋で。
巧妙な数値操作と事実は語るも真実を公表しない東電と政府。参会者1名。

改装中のトラック・マンション

PHOTO 太作

4/17 ナーガ（漁師・詩人、トカラの識訪之瀬島在住）が本社来訪。習、裏山の放ったらかしミカンを摘んで島に送る。

4/23と4/26の両日、東京で詩の朗読会。

5/9 ポンの二回忌を祝う音楽祭 in おべ。この祭りが中止となる。福島原発の放能（射）汚染空気が埼玉の山の中の会場に降りそそぐ恐れがあった。ポン（山田塊也）の娘たち家族は福岡へ緊急疎開。社主も同会場で竹かご編みのワークショップをやる予定であった。

4/29 新潟から農夫兄弟来る。二十代の刈谷兄弟である。ふたりとも、出口県岩国市広瀬（旧錦町）の堀江農場で腕をみがいた"安心野菜"の生産者。農場の影のボス・藤井吉朗の薫陶を受けている。半年ぶりの来訪である。

4/30 土居夫婦来る。県北の流山の人で震災の二日後に、フーカスで会っている。

5/3 山梨県早川町に行く。トラネコ市という名の山菜を即売する市に寄り、夜の交流会に加わる。トカラ塾の実省の縄張りに初参入。加藤芳朗・太作とナオ。トラックマンションを載せての物動。帰路、伊豆、湘南をぶらぶる。

ナナツヤマ群像を写した唯一の写真

トカラ・中之島のナナツヤマ開拓者たち。昭和25～26年ごろのもの。最後列の左から2人目、幼児を抱くんが半田正夫。

5/27 トカラ塾主催の出版会。『灘渡る古層の響き』（みずのわ出版、神戸市）の上梓を祝いパーティー。神武夏子のピアノ演奏付き。

6/1 ポンの散骨と奄美大島の海上で行う。先導者は娘の宇夢や縫夢たち。

6/10 流山市の真澄屋（吉田篤・アケ）主催の会。シンヤのコンサートの他に竹細工のワークショップ、他。

6/25 トカラ塾『ナオの南国語り』講題は「青海丸」。無人島化した臥蛇島（がじゃとう）の最後のハンケ舟。0.75トンしか積めない小舟であるが、この舟の歩んだ道は、時代の歩みでもあった。後に、隣りの平島の青年団に譲渡され、島の平準化精神ともおびやかす存在になる。

午後三時から、ギャラリー・ガラで。小田急線の梅ヶ丘駅前下車、歩いて二分（?）入場無料。投げ銭セーヴ。午後五時過ぎから、駅前の居酒屋で交流会がある。

七月某日、左に写し出された人に会う。鹿児島県十島村(トカラ)中之島月之出に住む半田正夫氏である。大正十二年生まれだから、本年は八十九歳になる。本籍は奄美群島南端の与論島。大牟田で生まれ、神戸で育った。この人の哲学は「人間の運ちゃあ分からんもんですよ」である。満年令の二十で従軍し、南方に向う。八千五百トンの船に三千五百人の兵を詰め込んで南下。戦雲急な昭和十九年九月末であった。その船が米軍の魚雷を二発受けて沈む。大時化の海に放り出される。フィリピン沖のバシー海峡でのこと。三昼夜、板につかまって漂流。ルイルイたる浮遊死体の中で三人が同じ板にのった。「もうダメだ!」と思う三日目の闇夜の海で日本軍の駆逐艦に救助される。小さな輸送船に移されて陸に向うが、一週間後に、また魚雷にやられて海上漂流。ルソン島に上陸するが、今度は現地ゲリラ兵に追われる。つづいて、マッカーサー率いる米軍が進攻してきて、ジャングルの奥深くに逃げる。半田氏は何度も死にかけるが、運が強いとしか言いようのない助かり方をしている。半田氏の別の名は「三百分の一」であった。全国の同期の船舶工兵は千三百人いたが、その中でのわずかなほき残り兵という意味である。戦後は俘虜として収容所に入り、昭和二十二年十二月に帰国。その数奇な「運」は何度聞いても驚くばかりである。中之島に住むことになったキッカケも「運」であった。

この人の生は日本の辿った歴史そのものであり、評を加えずに、語りそのものを文字にして記録しておくことが、後から来る人の参考になろうか?

『半田正夫証言集』は三部からなる。一部は出生から帰還(帰国)まで。二部が中之島ナナツヤマの開拓者たちの群像描写。三部が日本復帰後の十島村議時代の証言。発刊の予定はたっていない。

謀反証言集
巻一、出征記　三　半田正夫
巻二、ナナツヤマ群像　三　全
巻三、村議時代　三　南新会
編集
発行
出版
南海日報社

PHOTO 荒川愛一

独読毒書癖（ひとりよがりよをいもどく）

『気流の鳴る音』（真木悠介著）が ちくま書房の『展望』に連載が始まったことを社主は知っている。だが、読んではいない。文字から一番遠い世界に身を置くことで安心が得られると信じていたからである。

それから三十四年が経っている。肩の力を抜くことを知り、文字を友とする楽しみを知った。この書を読んでみる。何の異和もない。

己れが試みてきたことは、著者がメキシコのインディオ・ドンファンに語らせている、あるいは拾いあげている言説に吸いこまれてしまう。それが白人＝非白人、ないしは、オクシデント＝オリエントという二項対立ではなくて、日々を平常心で暮している島のジジババたちの尻追いをする己れの遠景を見ているようだ。ナヴァホ・インディアンの詩を著者はひく。これはアメリカ大陸の"文明化"の中での叫びでもある。

休む時なく 私は駆られ
止まる場所さえ 私は知らない
砂ぼこり起きて 私は風の声をきく
風はうなり、
金切声を
あげて叫ぶ
「引きかえせ！
道がちがう
ぞ！」

「道がちがうぞ！」の叫びは、この世の否定ではない。つまり、ネイティブが近代を否定しているのではない、ということである。これは、同時に近代のシンボルともいえる原発の肯定でもないのである。十九世紀後半から二十世紀前半にかけての物理の進歩は、我々に多くの考えるヒントをさずけてくれた。いや、十九世紀という限定も意味をなさないかもしれない。二百年、いや、もの永きにわたって開れなかったニュートン力学があり、遠くギリシャのユークリッドにもさかのぼるのかもしれない。ともかく、我々が求められているのは、近代の否定ではない。ネイティブ思想の全面肯定でもない。人間の幸せは、"進歩"という別名を我がもの顔で振り回している技術の発達とは同義ではない。取捨選択こそが幸せをもたらす要件である。その取捨選択する姿は、のたうち回る姿かもしれない。でも、それこそが人間の必要すべき特性であろう。

そんなことをこの本は提案させてくれた。

トカラ塾便り

5/27（金）『難渡る古層の"響き"』出版会。於東京・渋谷

6/18（土）竹細工ワークショップ　真澄屋主催　於流山

6/25（土）南風語り「青海丸」ナオの語り　於梅丘のバラ

7/23（土）南島学ライブトーク　安達明の八十余年の証言

9/上旬　トカラ・平島・浦島行　希望者はトカラ塾か当社へ。

「繕う」　PHOTO　荒川健一

おもしろいほどに近似している言い回しもこの本の中から見つけた。プルースト、モンテーニュ、そしてもうひとりは、プルーストもモンテーニュも、まだ、や、真木悠介も読んだこともない筑の人である。

「二十世紀、近代的自我の文学の到達点であるプルーストの小説は、あの目ざめの最初の瞬間、〈自分が誰であるかを知らず、何者でもなく、新しく、何にでもなれる状態にあり、脳はそれまでは きてたあの過去というものを含まず空虚になっている〉そのような瞬間からくりかえし始まっている（三〇六頁）この一文に見覚えがある。それは、その筑の人が、不足ぎな語彙力を絞り出してものした半自叙伝風の書物の中にあった。二十歳になる主人公の「人生の出発式」での感慨であった。真新しい目ざめと、うものは、かならずしも、目新しい発見が待っているわけではなく、前日に身にまとったボロやホコリとそれいさぎよく、と掃き清められてのスタートという意味で使われている。そして、その日は一日がかりで、前日と同じように、ボロとホコリにまみれることをくり返えす、という予感がつねに回る。そう予感した瞬間から、ボロが我が身にまとわりつくのだった。

『時間の比較社会学』（真木悠介著）の

こんな読み方もある

波現代文庫

主人公が、それでも生きていられるのは、モンテーニュの、

「わたしはいつでも、自分がなりうるものについて用意ができている。」「機会をまえにして、自己を柔軟ならしめる」習慣がついている（『エセー』）からだった。それは苦しまぎれの嘘であったのかも知れないが、他を思いつかないのだから、生きるしかないのである。死を射程に入れるほどの器量は筑の人には備わっていなかったようだ。

岡友幸 著
「Asia in my eyes」
（CD版写真集）
発行
GALLary 36EX
http// www.
36EX.com/
福岡市西区
愛宕2-11-34-
718
092.885.3201

デジタル化された写真集である。全五巻からなり、撮影開始は一九九八年五月となっている。そして、二〇〇一年八月が最も新しい撮影時刻である。タイトルに標記されているように、アジアを、それも東南アジアがロケ地のほとんどである。インド、バングラデシュ、インドネシア、マレーシア、シンガポール、ボルネオ、フィリピン、沖縄、韓国、福岡、東京を写している。十二年の間に被写体も移り変わり、そしてカメラとのぞく当人の眼も変っていく。作者を現地に足を運ばせた動機といえば、（ロケ地から帰ってきて）驚くのは「均一なコトバ」のハンランであった。「コンビニ、銀行、ショッピング街で出くわす、マニュアル通りの均一なコトバ、きわめて丁寧ではあるが、体温の感じられない応対」（「後記」）であった。耳の目をみつめ合い、ほほえみを交わす国々、人々への交歓の写真集である。

荒川健一作品集
荒川健一作品集
三五〇〇円＋税
醒態（せいたい） 現代書館刊

『醒態 SEITAI
醒（なまぐさ）さの百態』

「動物園の中の廃墟。水族館の中の廃墟。博物館の中の廃墟。醒というのは鼻を刺激する臭いという意味だ。死臭のようなものを発生させる光景ばかりを求めて、荒川健一は都会を十五年間彷徨ったのである」（萩原朔美 本文より）

どの頁をくってもドキドキする。見慣れない被写体だからではなく、あまりにも精巧な被造物だからである。縞馬の斑紋にしても、のたうつタコの吸盤のひとつにしても、これ以上の個の特性にはお目にかかったことがない。（見る者の深層をえぐり出してくれる書。）